
心

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心

【コード】
N8661Y

【作者名】
時雨

【あらすじ】
娘を失った母親を見続けた息子のお話。

この世界にいる誰が死んでも、社会っていう生き物のように変化するものは、何事もなかったように消化して、やけにあっさりと回っていく。

どんなに偉い人物だろうがそれには関係ない。

歯車の代用品なんていくらでも転がっていると神様が言外に示しているようで、沸々と無力感がこみ上げて来る。

クルクルと、クルクルと、クルクルと。

風に吹かれる風車のように、紐から放たれた独楽のように。

静寂を保ちながら回っていく。

もちろん、地球の自転が止まってしまうなんてことは有り得ない。

けれど、周りにいた人の心が凍ることはある。

その人との関わり方が深いほど強く、そして硬く。

そして、そうなってしまったものを氷解させるのは難しい。

母さんがそうだった。

僕が七歳ぐらいの時、三つ上の姉が死んだ。前触れとか虫の報せなんてものもなく、勝手に逝ってしまった。

そのことを僕たち家族が知れたのは病院から連絡があつたからだ。住所の書いてある、可愛いアップリケの入った財布を持っていたのだと言う。

人としては普通に早過ぎる終わりだ。

なんで死んだの？ とクシャクシャな顔で親に聞いていた覚えがある。今にして思えば割と残酷な質問だと思える。両親の方が僕より何倍も悲しかったのに。

小さかったから今じゃそれほど覚えてはいないけれど、周囲の間と比べればけっこう優しい姉だったはずだ。転んで怪我をしていたら消毒して絆創膏を貼ってくれたし、風邪を引いて寝込んでいれば大好きなお菓子も食べずに横で看病してくれた。お姉ちゃんだからと誇らしげに言っていた顔が、もう見ることできない今となってはとても懐かしい。だからこそ死んでしまったことが、とても惜しいけれど。

そんな姉に死をもたらししたのは、日本じゃありふれた一つの交通事故だ。医師達による懸命な治療も空しく、傷の大きさに耐えられずに姉の小さな体からは生命の灯が消えた。

父さんの話によれば、ボールを追いかけて路上に飛び出した男の子を守るうとしたそうだ。

自分も小さかったはずなのに正義感 いや違うな。そんなものじゃなくただ、ただ祖父ちゃんを病院で看取ったことがあつたから、人が死ぬのを見たくなくなつたんだと思う。ぼんやりとしたものではあつたんだろうけど、本能的な部分で拒絶感を持っていたのかもし

れない。

僕とは百八十度逆の生き方だ。

気持ちの悪い感情を消化することも出来ないままに葬式を終えた後、母さんは仏壇の前で毎日のように手を合わせるようになった。その日に何があったかをニコニコとした顔で語りかけたりもする。姉の誕生日を迎えれば好物だったハンバーグを作って仏壇に供え、何かの記念日にはその日と同じことをして写真に収める。

普通に見ていれば、優しいお母さんとも思える行動だ。

最初の二年くらいはまだ気持ちを理解することも出来た。僕だって幼いながらに悲しかったし、優しくかった姉のことを忘れられずにもいた。

けれど、それを見る気持ちだって十年も続けば変わる。

まるで何か悪いモノに取りつかれているんじゃないかと思えるくらい、何度も何度も同じことをするのだ。再生と巻き戻しを際限なく繰り返しながらボロボロの古いビデオをずっと見ているようで、本当に不気味としか言いようがない。顔の表情すら同じに見えてしまっ。

次第に外出もしなくなっていく。まるで月日と共に変わっていく街と一緒に、死の悲しみが失われてしまっのを嫌がるように。「お前の母ちゃんひきこもり」とかなんとか、小さい頃は心ないイジメを受けたりしたけれど、そう言われても仕方がないと諦められるくらいその様は酷かった。

修学旅行とか健康診断とかの成長が見えてしまう書類も見ようとしてくれなかったから、そういったものは全て父さんに書いてもらった。仕事で疲れているのに書かせてごめんなさいと、自分は何も悪くないはずなのに何度も思った記憶が多くある。

でも一番嫌だったのは、昔のアルバムを見ながら僕のことまで死んでしまったように、仏壇の前で姉に語りかけていたことだ。多分僕の伸長がどれだけ増えたかも、それからどーゆう人間に育ったのかも、何もかもを知らないんだろう。

母さんの中で僕はまだ純真無垢な社会を知らない子供なのだ。

そんな母さんは世間から特殊な精神病にでもなったと思われているのか、大人達からは哀れみと同情の目を向けられた。可哀想だねと何度も言われた覚えがある。それが自分のみじめさを一番に感じさせて、心に深く突き刺さると言うのに。

とつとつ心配になった父さんが精神病院に連れて行くことしたら、私は病気じゃないとかなんとか、恐ろしい表情でヒステリックに叫びながら暴れて、手の施しようがなかった。その時の表情はまるで鬼のようで、直接的に怒られるよりも数段怖かったと思う。学校の先生なんかの比じゃない。

一度そういつたことに対するイライラが限界にきて、罵詈雑言と一緒に否定的な言葉を吐き出したら、なんでそんな事を言うのと必死な顔で迫ってきて本当に嫌になった。

だから今日、僕は

母さんを殺した。

外では散った桜が舞っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8661y/>

心

2011年11月25日23時50分発行